

『宇宙の誕生と終焉』

松原隆彦 著（サイエンス・アイ新書，本体価格 1000 円＋税）

矢治健太郎（核融合科学研究所）

2018 年 10 月、国際天文学連合（IAU）によって、「今後、宇宙の膨張を表す法則は『ハッブル・ルメートルの法則』と呼ぶことを推奨する」という決議案が採択されたことは記憶に新しい。この「ルメートル」という名前を聞いて、「誰？」と思う人から、「ああ、あのルメートル！」と思った人まで反応は様々だったろう。この IAU の決議案、唐突に思ったかもしれないが、前々から、ルメートルの方がハッブルよりも前に宇宙膨張の発見をしていたとしてよく知られていた。この決議案の経緯や詳細については、岡村定矩会長が、会のホームページに解説記事を書かれているので、ここでは詳細は省く。

さてさて、前置きが大変長くなったが、この『宇宙の誕生と終焉』でも、「ビッグバンの父、ルメートル」という見出しで、ルメートルの業績について紹介している。さらに、アインシュタインとルメートルのツーショットという貴重（だと思う）な写真も載っている。ちなみに、本書が出版されたのは 2016 年なので、「前々から」というのもうなずける。

本書は、「最新理論で解き明かす！ 138 億年の宇宙の歴史とその未来」というリードで、まさに宇宙の誕生から終焉まで、最新の研究成果をもとに解説している。といっても、いきなり、「宇宙の誕生」から語るのではなく、例えば冒頭に「はやぶさ」の話題も登場するなど、まずは、わたしたちにとって身近な宇宙の話題から始まる。サイエンス・アイ新書の特長でもあるが、ビジュアルかつカラフルな図版が多く、読み進める助けになる。そのうち「量子トンネル効果」「スカラー場」なんて、難しい用語も登場してくるが、とりあえ

ず、読み飛ばしても大丈夫。宇宙論の定番「インフレーション宇宙」についてもページを割いている。そして、あまり考えたくないが、われわれの地球や太陽、そして宇宙の終焉についても解説している。ちょっと読み始めると一気に読了している自分に気がつく。

著者の松原隆彦氏は、本書執筆時は、名古屋大学大学院理学系研究科准教授で、2013 年には日本天文学会の第 17 回林忠四郎賞を「統計的摂動解析理論に基づく観測的宇宙論の開拓」で受賞している。専門は宇宙論。現在は、高エネルギー加速器研究機構素粒子原子核研究所・教授を務める。宇宙論に関する教科書の他、一般向けの本も多数執筆している。本書のあとにも、4 冊の本を執筆しているので、読み比べてみるのも一計である。

松原隆彦氏の近著（抜粋）

『文系でもよくわかる 世界の仕組みを物理学で知る』山と溪谷社（2019/2/16）

『図解 宇宙のかたち 「大規模構造」を読む』光文社新書（2018/10/17）

『私たちは時空を超えられるか 最新理論が導く宇宙の果て、未来と過去への旅』サイエンス・アイ新書（2018/10/16）

『目に見える世界は幻想か？ 物理学の思考法』光文社新書（2017/2/15）

『宇宙はどうして始まったのか』光文社新書（2015/2/17）

『宇宙に外側はあるか』光文社新書（2012/2/17）

『宇宙のダークエネルギー 「未知なる力」の謎を解く』光文社新書（2011/9/16）土居守との共著。